

即興的な身体表現活動と音楽表現活動から考える自発的表現活動* — 保育者が表現活動に感じる不自由さについて —

井 中 あけみ
高 橋 うらら**

I. はじめに

本研究は、領域「表現」に則り、子どもたちの自発性を意識した表現活動を探求するものである。未分化な時期の乳幼児たちの身体と音楽の表現に視点を置き、その表現活動の取り組みが、育成すべき子どもたちの「資質・能力」の土台を築くことができると考える。

近年コミュニケーションの形態が変化していく中、特に人との関りについては、保育においても積極的に様々な表現活動を取り入れ、自発的表現を体験する機会を持つことが必要であると考えている。また、その活動から、子どもたちの協同性を育てていく表現活動を考えることも見逃してはならない項目であろう。しかし、保育者自身がその表現活動において、子どもの自発性を育てることとは何に注目することなのか、またそれはどのような活動を意味するのか、保育者が活動実践の過程について、不安や戸惑いを感じるのも事実であろう。これらについては、筆者が子どもの自発的表現活動調査時に行った保育者へのアンケートでも確認されている¹⁾。保育者の経験やその考え方は、子どもたちの育ちに直接的に関わるものであり、これら自発的活動への研究調査は、保育者を基点として早急に進めていくべきであると考えている。

そこで今回、保育者を対象とした即興的表現活動とそれに対する意識調査を実施することとした。即興的身体表現活動と即興的音楽表現活動、それら両者の調査を実施し、そこでの保育者たちの自発的表現活動への感じ方、また活動への不自由さについて調査することとした。

語義規定

本論における「身体表現活動」は、「自分が感じたことや考えたことを自由に身体で表現すること」を示す。「即興的身体表現活動」については、その場にて聴いた音を考えたまま感じたままに身体で表現することを示す。また「動く」という表記は「身体で表現する」と一致するものである。

「即興的音楽表現」については、「自分が感じたことや考えたことを自由にピアノで音を

* 本論は、2020年5月9日（土）・10日（日）の第73回日本保育学会にて、ポスター発表を行った「自発的な表現を不自由に行っている保育者の意識について—即興的身体表現と音楽表現の調査から—」のデータを基に加筆したものである。

**東京都市大学 人間科学部 児童教育科 准教授

1) 井中あけみ・高橋うらら著 「「音楽」から考える子どもの自発的身体表現活動—保育者の視点を踏まえて—」『豊橋創造大学短期大学部研究紀要』第36号 2019年 pp.7-8

出す（演奏する）こと」を示す。本論では、その演奏技術や理論、作曲の技術など専門性について触れないこととする。

II. 研究目的

これまで表現教育は、既存の表現の再現などを中心として、その技術の修得に関心が高かったといっても過言ではない。また、それは「大人の目」から見た、見栄え、出来栄を評価しているともいえよう。しかし、今回の改訂にある「10の姿」を含め、領域「表現」に求めるものは、自発性・主体性や協同性を考えたものであるといえる。そしてそれらの具体的な活動方法は、各機関に任されており、特に音楽・身体においてはその表現の方向性が様々であり、経験豊富な保育者といえども、表現教育から考える自発的活動については、多かれ少なかれ不安が生じていることも推測される。これについては、結果が数字として表れる活動とは違い、その優位性の証明が得られないことも保育者の不安を招く原因と考えられよう。そこで今回は、保育者自身が自由な表現への視野を広げ、既成の表現ばかりに依存することのない「自分なり」の表現を模索しながら活動することに着目した調査を行うこととした。

これまで、保育者養成課程での学修項目である保育表現技術「表現」の中でも、特に音楽は技術の向上を目指すことに重きが置かれ、また養成校の学生の育ちの中では、その必要性を強く印象付けられてきたことも事実である。特にピアノ演奏技術、身体表現技術の習得については、その経験値が大きく左右していくイメージも持たれてきた。

しかし、平成29年幼稚園教育要領、幼保連携型認定こども園教育・保育要領の改訂、保育所保育指針の改定及び告示を受け、その中の領域「表現」の内容を考えると、保育者の表現教育への認識の仕方は、形を変えていくものとなるはずである。

そこで今回は、これまで筆者が行ってきた、子どもの自発的表現活動に対する保育者のアンケート調査を基に、保育者自身の自発的表現活動についての意識調査を実施することとした。そして保育者が実践して感じる自発的表現活動の調査・観察から、今後新たな自発的表現活動を保育者にアプローチすることができればと考えている。

III. 問題の所在

幼稚園教育要領・保育所保育指針における領域に掲げられている事項は、総合的な遊びの中で育まれるものであるが、一般的に、依然として保育者養成校での領域「表現」への学修体制は、科目に置き換えれば「図工（美術）・体育・国語・音楽」となり、そこから保育内容技術への関連性・応用、さらにその基礎的知識や基礎技術を修得していく学修形式であり、その形式については、これまで様々な研究や議論がなされている。

しかし改訂を改めて意識すると、子どもたちの表現活動とは、乳幼児の生活を中心とし、そこから発展していくことができる主体的活動、協同的活動の展開が必要であると考ええる。

筆者が行った、「子どもたちへの自発的即興身体表現活動」²⁾の調査からは、「自由な身

2) 同上

体的表現活動を子どもたちに実践してみたいが、実践することに不安がある」「一人ひとりが違う動きをされていていいのか不安になる」「全員が予想できる活発な動きをしていないと、それは活動といえないのではないかと思う」「決められた動きを練習した後からでないと、ぐちゃぐちゃな活動としか受けとめられない」などの保育者たちの事後アンケートの言葉が85%となった経緯がある。つまり、保育者自身、自由な活動からみられる自発的行動や、模倣から発展する協同的活動など、子ども自身が考えた表現の種類によっては、その自由さの受け取り方に抵抗があることが発見できている。

コンスタンス・カミイとリタ・デブリーズ³⁾は、自己選択の自由のあることが大切であるとしており、「ピアジェは、子どもに選択し、決定する自由を与えることの重要性を主張する。」しかし、「実生活においては、子どもに無制限の自由を与えることはできないことは彼も認めている。」と示している。保育者が子どもの自由な表現活動をいかに受け取るかは複雑であり、同時に保育者自身が考えるその自由な表現への考え方が問われるものであろう。

一般科目と比較すると、表現の分野は評価についても基準が定めにくいいため、身体表現活動についても、音楽表現活動についても、既存の活動を保育に活用する傾向は否めない。また決められた動きで、全員が揃った表現をすることは、保育する側からすると安心感があり、他者と比較することができることから、その基準も設定しやすくなるであろう。さらに、創造的な表現活動の中でも、制作活動は、その作品が実在する「物」として繰り返し確認でき、修正も可能とすることができる表現活動と考えられるため実践しやすい傾向にある。しかし身体表現、音楽表現の視覚・聴覚にうたえる表現は、その過程や実現方法を形として残すことができないため、保育者が不安や不自由さを感じてしまうのは納得できるところでもある。

そのためか、例えば音楽については、音楽表現活動を創造的な主活動とするのではなく、制作活動の導入に曲を用いたり、制作物を活用する際などの関連表現として歌唱したりするなど、子どもたちの意識をより高めるための並立的又は補足的な要素として用いられることが多くみられる。また、子どもたちが具体的に音楽を表現する活動については、簡易楽器での合奏演奏や鼓笛隊など、協同的で統一的な演奏技術のレベルを問われる分野として扱われることが特徴といえよう。これらのことから考えても、子どもたちが自分らしさを動きや音で表現する自発的表現活動への取り組みは、保育者にとって戸惑いは大きいといえよう。

村田⁴⁾は、「ダンスでも意図的に創られた完成された作品よりも、偶発的に生まれる即興的な動きの中にこそ新鮮なエネルギーや個性がある」と述べており、「揃えること自体が悪いのではない、揃えることで失われるものが大きいから問題なのである。形を揃えようとするれば、人と違うことは「間違い」として修正される。」と述べている。この「間違い」という点については、先に述べた「子どもたちへの自発的即興身体表現活動」の保育者へのインタビュー調査の言葉からも採取できている。保育者自身の考え方は、子どもの自発的表現活動を制限したり、受け止められなかったりなどの結果を招いている。

3) コンスタンス・カミイ、リタ・デブリーズ著 『ピアジェ理論と幼児教育』チャイルド社 2003年 p.54

4) 村田芳子編著 『「体ほぐし」が拓く世界』 光文書院 2004年 p.145, p.147

今回についても、本調査の事前インタビューから、「身体や音楽の自由な表現活動については、実践に戸惑いや不安、違和感があり、進んではやらない」という声が12人中8人から聴取している。

そこで、本調査では、「表現」に関わる活動の中でも、特に自発的活動を行うにあたっての保育者自身の捉え方や考え方について、保育者の即興的身体表現活動と即興的音楽表現活動から、自由な表現活動について保育者の意識調査を行うこととする。そこから、子どもたちの自発的活動に踏み切れない不自由さとは何であるのかを探っていきたいと考える。

IV. 研究方法

今回の調査は、以下の村田芳子⁵⁾の「4つのくずし」を活動内容に取り入れ、自由な即興的身体表現活動と自由な即興的音楽表現活動の両者の調査を実施した。

この「4つのくずし」の内容から、それぞれの保育者たちが、どの活動に抵抗があるのか、又活動への不安が大きいのかなど、ポイントを絞った具体的な問題点を探っていくこととする。

IV-1. 即興的表現活動内容について

今回の調査では、即興的身体表現活動と即興的音楽表現活動のテーマを「雨と風」とした。その動きの中に「4つのくずし」を取り入れることにより、即興的表現活動が未経験である保育者たちの自由な動きへの誤解や偏見を回避するために、これらの項目をヒントとしての動きを即興的に実施することとした。

但し、保育者たちには、この「4つくずし」の内容については敢えて説明はしていない。

1. 即興的身体表現活動の表現内容項目

[表1] 村田芳子の「4つのくずし」

項 目	動きの内容
1. 空間のくずし	方向や場の使い方の変化
2. 身体のくずし	ねじったり、回ったり、跳んだり、体の状態をいろいろ変えてみる (極限の動きが非日常の動きになる)
3. リズムのくずし	素早く、ゆっくり、急に止めてなど (リズムや速さの変化がメリハリのある動きへ)
4. 人間関係のくずし	離れたり、くっついたり、反対にしたり、くぐりぬけたり、リフトしたりして一人ではできない動き

5) 村田芳子著 「リズムから表現へー2つの入り方・4つのくずしー」『女子体育』第51巻 7・8月号 2009年 pp.24-25

2. 即興的音楽表現活動の表現内容項目

[表2] 「4つのくずし」の内容を参考としたピアノによる即興的音楽表現内容項目
 即興演奏調査の項目（調査人が独自で設定したものである）

項 目	身体の動きの内容	即興演奏の内容
1. 空間のくずし	① 方向の変化 ② 場の使い方の変化	① 音域を変える ② 強弱をつける
2. 身体のくずし	③ ねじる ④ 回る ⑤ 跳ぶ	③ グリッサンド ④ 装飾音符 ⑤ スタッカート
3. リズムのくずし	⑥ 素早い ⑦ ゆっくり ⑧ 急に止めて	⑥ 素早く弾く ⑦ 遅く弾く ⑧ 流れを急に止める
4. 人間関係のくずし	⑨ 離れたり、くっついたり、反対にしたり ⑩ くぐりぬけたり、リフトしたりして一人ではできない動き	⑨ ペダルを用いた和音で音の重厚や薄さなどを感じさせる演奏 ⑩ 重音で移動し、音の高低や大小するなどの多くの音を使用し、幅の広さの変化を示す ※但し、この項目に関しては、内容的に合奏やアンサンブル等のイメージに置き換えることが最も近いと思われる。しかし、今回は合奏の取り組みをしないため、個人の演奏の中でオーケストラを展開するようなイメージとした。

※注 ピアノ奏法については、以下の条件いずれも可とすることとした。

- ・右手と左手が同様の動きをする。
- ・右手と左手が別の動きをする。
- ・片手のみの演奏をする。
- ・片手ずつの演奏を交互にする。
- ・「拳」「グー」「パー」などの手の形で演奏する。

ここでは、調査人（井中）が、身体表現で用いた村田良子の「4つのくずし」の中の項目を、即興ピアノ演奏方法内容として項目を設定し（表2）、即興的音楽表現活動（ピアノ即興）の観点から自発的表現に対する保育者の意識調査をすることとした。

音楽は、身体と比較すると、演奏による自由な創作表現というものの位置づけが難しく、

特に作曲は音楽理論が重要である。ピアノ技術習得のための学修をしてきた保育者は、音楽の三要素や音楽理論に則り作品が完成することは、多かれ少なかれ知識として承知している。作曲理論や演奏技術、アレンジ技術を持っていることで、初めて即興演奏が行えると考えられるのも当然といえよう。

今回は、被験者である保育者たちに対して、音楽的（メロディーや和声感、拍子、リズム）な「即興作品ピアノ演奏」を期待する調査ではないことを条件として、即興的音楽表現活動が実施できるよう、①から⑩の使用項目を提案した。またこの10の項目は、保育者たちのピアノ技術や経験年数にバラツキがあるため、保育者の演奏技術の数値化を図るものとならないよう配慮したものでもある。

従って、被験者たちには、メロディーの作曲をしたり、和音進行を考えたりなどの演奏を試みるのではなく、[表2]の①から⑩を好きなように取り入れ自由な音を組み合わせた自由な音創りを行うよう説明した。但し、強制的に使用する必要のないことも促した。

Ⅳ-2. 調査の方法について

①調査人

身体表現熟練者（高橋）、音楽表現熟練者（井中）

②被験者 静岡県S市幼稚園保育者12名

調査の対象

[クラス担任8名（年少担当3名、年中担当3名、年長担当2名、管理職他4名）]

— 担任の経験年数 —

1年目2名	2年目1名	3年目2名	5年目1名	7年目1名	23年目1名	管理職他4名
-------	-------	-------	-------	-------	--------	--------

③場所 静岡県S市幼稚園 多目的ホール

④日時 2020年12月2日（月）保育終了後

⑤調査方法

調査は、ビデオ撮影（身体・音楽）による記録と調査人の目視とし、個人の特定はせず撮影記録を公表しないことを約束して行った。

1. 即興的身体表現活動調査

【内容】

①村田芳子「4つのくずし」の活動内容を実施するため、身体表現熟練者（高橋）によるウォーミングアップの実施

→高橋によるファシリテート

②テーマを「雨と風」とし、①で実践したものを基に、即興的身体表現活動を行う。

＜実践方法＞

・一回目（5分間）・・・グループによる（6名×二組）即興的身体表現活動

➡記録はしない

予告なしで調査人による演奏を付けて実施する。但し演奏の様子は見えないようにし、即興的演奏とする。

※一回目はテーマへの動きの「イメージ」を描くために練習とする。

・二回目（3分30秒間）・・・グループによる（6名×二組）

➡記録・調査実施開始

予告なしで調査人による演奏を付けて実施する。但し演奏の様子は見えないようにし、一回目とは違う即興的演奏とする。

※12人を2つのグループに分け、別々に活動を行い、お互いに活動の様子を観賞する。

※ここでの即興演奏は、4つのくずしを基とした[表2]を用いた演奏としているが、保育者にはそれは知らせていない。

2. 即興的音楽表現活動（保育者によるピアノ即興演奏）調査

【内容】

- ・テーマを「雨と風」とし、即興的身体表現で体験したことをイメージしながら2分から3分ほどの即興的演奏を行う。
- ・即興演奏に用いる項目内容の[表2]の①から⑩の項目について全員に例を試演し、即興的演奏の説明をした後、一人ずつ部屋に入り演奏を行う。

※ここでの即興的音楽表現は、個人が「4つのくずし」の即興的身体表現活動で経験したことを基に、[表2]の①から⑩項目を参考にして、自由な演奏を試みるよう提示した。ここでは、即興演奏中に音楽熟練者によるファシリテートは行わない。

<表現のための楽器の選択理由について>

本来ならば、子どもたちの音楽表現に用いる楽器はピアノではなく、簡易楽器や手作り楽器などの選択肢が多数あると考えられるが、今回の調査については、保育者が常時保育中に活用するピアノを使用することとした。理由としては、日頃は保育における既成曲の技術の習得が主であるが、それとは異なった今回の表現方法について、それをいかに表現するかという点に着眼することとした。

【演奏方法】

保育者は一人ずつ保育室にて、アップライトピアノで即興的演奏を行なった。また、それぞれの演奏が聴こえない場所（保育室）を設置し、各演奏を実施、録画をした。

3. 事後アンケート調査（記述式）

1と2の調査が終了後、記名式の記述アンケートを実施する。

V. 調査結果

【結果1－即興的身体表現活動】

一回目の即興的身体表現活動では、「4つのくずし」に基づいた高橋のファシリテートによるウォーミングアップ後の活動であったため、保育者の多くが、ウォーミングアップで経験した「4つのくずし」を活用する様子がみられ、始めてから1分半ほどすると、それぞれ

の保育者が自分なりの動きを表現しようとする様子がみられた。同じ動きを繰り返す保育者も2名ほどいたが、自分なりの動きを考えている姿は見て取れた。

その後、即興的音楽表現のピアノ演奏（調査人）を付けた2回目の活動で、記録を開始した。

以下は調査人のビデオ観察による分析と調査時の記録である。

[表3]

項 目	身体表現熟練者（高橋）調査結果
(1) 空間のくずし	① 方向の変化 ② 場の使い方の変化 ①と②の項目とも空間に対しての感覚は、視覚を通して理解できるためよく動けているように観察できた。
(2) 身体のかずし	③ ねじる ④ 回る ⑤ 跳ぶ ③のねじるについては、1名の保育者しか実施できていなかったが、その他の項目については、身体について内観的な理解によるものではあるが、「力を入れる」「力を入れない」など、単純な感覚によるところが多いため被験者のやりやすさが感じられ、自然に動けているように観察できた。一方、内観的な理解を身体ですぐに表現できないもどかしさを感じている様子が見てとれた。
(3) リズムのくずし	⑥ 素早い ⑦ ゆっくり ⑧ 急に止めて リズムは、もともとヒトの内にある一定のリズムがあるためか、「崩す」ということに対しての抵抗があるように感じられた。そのためこの崩しに対しては、⑦のゆっくりは、実践することができていたが、その他についてはファシリテートや言葉掛け無しでは難しく、各々のタイミングでのリズムのくずしはほとんどみられなかった。
(4) 人間関係のくずし	⑨ 離れたり、くっついたり、反対にしたり、 ⑩ くぐりぬけたり、リフトしたりして一人ではできない動き 2つのチームは、それぞれに最後に中央に集まり、動きを終止するという形をとっていた。これら一人ではできない、人との関わりや協働することによる表現という動きには、全くファシリテートの必要はなかった。 運動能力、技能の高い要素が求められる⑩（リフト等）は今回の参加者の運動神経からは難しいことは容易に推察できたが、他者の腕や脚をくぐり抜けるなど⑩に対して、十分な可能性を期待できると感じた。

【結果2 - 即興的音楽表現】

即興的音楽表現（ピアノ即興演奏）調査については以下のような結果となった。即興的身体表現活動と同様に、テーマは「雨と風」で即興的音楽表現を行うよう提示した。

[表4]

項 目	音楽表現熟練者（井中）調査結果
1. 空間のくずし ①音域を変える, ②強弱をつける	①と②の項目とも空間に対しての感覚は、視覚を通して理解できるためよく演奏できているように観察できた。 ①の高低については、身体活動と同様に、ピアノ鍵盤の高低を視覚的にも理解しやすいためか実践できていた。 ②の強弱についても、見た目での指と体の体重による変化が伴って表現するためか、6名が自信を持って取り組んでいる様子があった。
2. 身体のくずし ③グリッサンド ④装飾音符 ⑤スタカート	技術に関係ない身体の活用で演奏できるためか、ほぼ全員が③に関しては行っていた。 ⑤は跳ぶという視覚的にも、内観的にもわかりやすい行為のためか、全員が実施していた。
3. リズムのくずし ⑥素早く弾く ⑦遅く弾く ⑧急に止める	演奏は、一定の拍子で演奏するという感覚のためか、「崩す」ということに対しての抵抗があるように感じられた。同様のリズムが続く演奏が童謡曲に多くみられることなども影響しているように感じられた。 ⑥⑦は、曲の流れとして、ゆっくりから速くなるという変化の伴う演奏が3人にみられた。しかしその他の保育者は速いテンポの演奏に、慣れていない様子があり、遅いままの一定のテンポで演奏など、テンポを変化させるということに対応できない様子が見受けられた。 ⑧の急に止めたり動いたりという変化を自由にする事への意識はなかなか得られないようで1名のみが用いていた。
4. 人間関係のくずし ⑨ペダルを用いた和音で音の重厚や薄さなどの広がりを感じさせる演奏 ⑩重音で移動し、音の高低や大小するなど、音の数などの幅の広さの変化示す	⑨については、ペダル使用に抵抗ないことがポイントであるため、ペダル未経験者には、無理な取り組みであった。 ペダル使用をした保育者の中には、ずっと踏んだままの保育者もいた。 音が響き続けることへのイメージと音が単独で鳴る場合のイメージの区別をつけることができない保育者もいた。 ⑩は、ピアノ経験が豊富で比較的技術レベルのある人は実践していたが2名ほどであった。

それぞれの結果の[表3]と[表4]を比較すると、即興での表現活動には、身体の動きと、ピアノ演奏には共通点があったことが分かってきた。

(1) 空間のくずし (①, ②)

視覚的な認識度が高く、どちらの表現も自然に実施できる様子がみられた。

(2) 身体のくずし (③, ④, ⑤)

身体の「ねじれ」や音楽の「装飾音符」など、日頃ほとんど保育で使用しない(馴染みがない)ものについては、動きがみられなかったが、その他については、単純な感覚であるためか、頻繁に取り入れることができていた。

(3) リズムのくずし (⑥, ⑦, ⑧)

一定のリズムやテンポを崩すということに大きな抵抗感があることが、身体と音楽の

両者に共通していることがわかった。リズムや速度の一定感は、人と同じことをするという行為の場合、最も重要なものであるため、同じ動きを繰り返したり、同じテンポで動き続けたり（弾き続ける）という保育者の演奏がみられたことは当然の結果ともいえよう。自由な動きや演奏を表現する場合、この崩しが自由に活用できることは、大きなポイントなる。しかし、ダンスや楽器や歌唱演奏は、一定のテンポやリズムでバランスを保つことを重視することが多いため、この時間的な崩しは、保育者にとって不自由さと感じるものとなったといえよう。

(4) 人間関係のくずし (⑨, ⑩)

これについては、身体表現についての部分で、人との関りで動きを共有していく形がみられたことが大きな特徴であった。多人数で表現をすることについての関りが理解できていることであり、子どもたちの自発的活動へのファシリテートも期待できるものと見受けられた。また、今回は実施できなかったが、即興的音楽表現活動においても、人との関わりを意識した自由な即興的演奏については、今後調査として、取り上げていく項目としたい。

ここで着目したいことは、即興的表現の両者に共通した結果となった(3)リズムのくずしについてである。保育者が自発的活動の不自由さを感じるものの一つとして、この「リズムのくずし」への抵抗を感じている、又は気が付いていないことが、不自由さを感じる一つの原因であると考えられる。

テンポを一定に保つ、人と同じリズムで活動するというということは、集団のバランスを保つことに繋がる重要な学びである。しかし、子どもたち一人ひとりの個性を大切にし、それぞれの表現を重んじ、その自主性を育てる過程には、それぞれの音楽的リズムを自由に表現する場も当然必要である。またそれを受け止められる保育者も必要である。それによって子ども同士が感じ合い、関わり合い、認め合うことにより、互いを高めることのできる環境が生まれていくはずである。これらについては、保育者の即興的表現活動後のアンケートの中にもその心情を読み取ることができている。(VI-2. 自由記述について[肯定的回答]即興的身体表現についての下線部分)

VI. アンケート調査について

VI-1.

[表5]

⑦身体と音楽ではどちらの即興的表現がしやすいかと思っていますか	身体・・・6名 音楽・・・4名 どちらも・・・2名
④日頃、保育の中で子どもたちが自発的に行う活動を取り入れていますか。	取り入れている・・・5名 取り入れていない・・・7名
⑤即興的なピアノ表現をしたことがありますか	ない・・・10名 やってみたが、できなかった・・・2名
⑥即興的身体表現をしたことはありますか	ある・・・8名 ない・・・4名
④ピアノの即興的演奏を行った際、事前の身体表現活動から影響を受けたと思いますか。	受けた・・・12名

VI-2.

① 一自由記述について—

【肯定的回答】

<即興的身体表現について>

- ・非日常的な動きをしたため新鮮であった。普段自分を表現する機会がないため、とても楽しかった。
- ・自由に動くということは、難しいと思い込んでいた。しかし、少しずつ動いていくうちに、体が自由に表現していく気がした。
- ・最初は周りを気にしており、「恥ずかしい、いやだな」と感じていたが、最終的には、周りを気にした自分の動きを表現していた。子どもたちにもこの気持ちを伝えたいと思った。
- ・音に合わせて動いたら、自然と動けた。
- ・人のうごきを見ることで、周りにあるものが想像できて、動く楽しさが湧いてきた。
- ・好きなように体を動かして、周りとの違いを楽しむということを発見した。子どもたちともこんな風に共有することを楽しみたい。

<即興的音楽表現について>

- ・身体活動で行った動きがイメージとなり、そのイメージをそのままピアノに投入できた。「恥ずかしい」という気持ちが不思議になかった。
- ・リズムや音程を考えず、その場で弾くことで、身体を動かしたときの自由な感じを自分がリラックスして楽しんでいることが味わえた。
- ・自然と景色が見えたので、体が自由に動いたまますを演奏にした。頭で考えた表現ではなく、気が付いたら、弾き終わっていた。
- ・強弱や高さを表す時、自分の体の動きを思い出しながら弾いた部分があった。
- ・自分が動きたいように動いた後だったため、ピアノも自由にありのままに感じたままに弾

くことができたと思った。

※参考＜調査前の即興演奏への否定的意見＞

- ・「即興といわれると、その技術がないと思ってしまい、日頃はどうしても手が付けられない」
- ・「ピアノ技術力がないということが負い目であり、自分の表現は間違っているのではないかと思うのでできない」
- ・「指をいかに動かせばよいか、そればかりが気になる」

【否定的回答】

＜即興的身体表現について＞

- ・普段あまり動かない自分を感じた。
- ・楽しいとは思ったが、人に見られると思うと動きが委縮する。

＜即興的音楽表現について＞

- ・音楽を自由に演奏するということが自分の中からはあまり出てきたことはない。
- ・雨は、ポツポツ・・・ピアノでどうするか・・・自分なりでやってみたが不明確だ。

※これらの否定的回答は、同一人物（2名）の回答であった。

②分析

活動前インタビュー調査では、12名中10名が即興的活動について、不自由さを感じるがあると回答していたが、アンケートでは、調査後には10名が今回の即興的活動表現に対して肯定的な感想を述べている。事前のインタビュー調査の「即興的身体表現に抵抗がある」、「何をしたらよいかわからない」などのコメントが、活動後には特に周りの様子がプラスに感化され、自分の動きをすることへの発展性を感じ、表現を広げることに関心を感じていることがわかった。また、自由に動くことが難しいと感じていた保育者が、自然な活動に変化していく様子も記録できた。さらに、即興的身体表現後の即興演奏は、7名がピアノ演奏やその演奏方法に抵抗なく「自分なりの演奏」を表現できたであろうと回答している。また、身体表現活動から影響を受け、即興演奏に自然に取り組めたことも述べており、身体の動きが音のイメージと密接に関係していることを実感していたことも述べられている。自由記述の＜即興的音楽表現について＞の欄には、肯定的回答の全てのコメントに、即興的身体表現活動の体験は、即興演奏に応用されており、イメージを反映できていることが書かれている（ 網掛けの部分）。

これらのことから、保育者たちが、身体・音楽の自由な表現活動への取り組みを発展させていくとするならば、まずは、今回不自由さへの原因の一つであると分析した「リズムのくずし」について、身体表現活動をきっかけとした音楽表現活動を試みていくことが効果的ではないかと考える。今回、身体の動きについての様々な動き「空間のくずし」「身体のくずし」を経験することにより、即興演奏にそれを反映させたという記述が多くあった。体という感覚的な活動を通して、想像したり、感じたりしたことが音に表現されたことは新たな発見である。

これまで筆者は、身体表現活動は、音の感受から身体表現へという方向性が一般的である

ということに基づき研究を行ってきた。また、それは身体表現専門家や専門学生、現役保育者、保育者養成校の学生の調査からしても、半数以上が、「音をきっかけとして、身体の動きが思い浮かんでくる」と回答している。薬師寺⁶⁾は、「音楽という刺激は身体の動きを引き出しやすい。そして、これらの動きが、子どもの生活全般から子どものイメージによって選び出され、新しい形となって表現されているのが分かる。」そしてさらに、薬師寺は、その逆の実践「動き」から「音」についても実践をおこなっているが、十分な結果は得られなかったとしながらも、「身体表現活動は、音楽科教育においても積極的に取り組むべき領域であろうと思われた。」としている。

ここでの保育者たちへの調査では、視覚的感覚的に刺激を受けた身体表現活動から、それを音に表現するという「動き」から「音」への表現の応用、広がりの方角性が見えたといえよう。山田⁷⁾は、「音楽を生み出すことも、感じとることも、伝え合うことも、すべて身体をとおしておこなわれる。わたしたちは、そうやって音楽する身体をいきている。」としている。未分化で技術を修得していない子どもたちの表現教育においては、これら身体と音楽の表現の相互作用について無限の可能性を受け止めていく必要があると考える。

これらのことから、「自由な表現をすることの不自由さ」を、音楽表現に特化して考えると、「作曲ができない、編曲できない、さらに演奏に自信がない」ということは、知識や技術の必要性を知っている保育者にとって重くのしかかってしまうことは否めない。しかし、今回の調査から考えると、その他の表現媒体との関連を含め、子どもたちの発想や創造性を受け止めていく保育者として、自分の表現のきっかけの所在を知ったことは重要なポイントであり、積極的にこれらの実践を行い、表現教育への発展につなげていく価値はあると考える。また、そこから得られる子どもたちへの表現活動の効果としては、保育所保育指針・幼稚園教育要領に記されている「自然の音」「身近な音」といった身近な素材への傾聴力、またその素材の活用法についても、その活動方法の発見が期待できるのではないかと考える。

VII. 今後の課題

金光⁸⁾は、「音楽」と「身体表現」の関係性について、「身体知や身体技法そして身体性という観点からは、楽曲分析からはみえてこない音楽の相貌を浮かび上がらせる」としている。今回の調査では、即興的身体表現活動後に行った即興的音楽表現活動に不自由と感じなかったという回答を10人から得ている。これは、今回「4つのくずし」を基に行った即興的身体表現活動時において、自発的な動きに抵抗がなかったことや、人の動きや協動的な動きから自分の創造性に気が付いた、などという体験が、即興的な音楽表現活動につながった前向きな結果であったといえる。

これまで保育者自身が、自発的表現活動を不自由と捉え、既成的な表現を選択してきたとすれば、子どもの自発的表現について、その子どもの表現の真意を汲み取ることは不可能で

6) 薬師寺美江著「第3章 自然現象(実験)から始まる」小島律子・澤田篤子編
『音楽による表現の教育 — 継承から創造へ—』晃洋書房 2000年 p.56

7) 山田陽一著『響き合う身体』春秋社 2017年 p.6

8) 金光真理子著「音楽科における「身体表現」の再考:「音楽」と「身体」の関係性」
『横浜国立大学教育学部紀要, I, 教育学』2018年 p.16

あったといえよう。その意味からも今回の調査は、被験者である保育者たちの既成的概念を払拭できるきっかけを作ったと考えられる。

今後は、「身体と音楽」を具体的に関連させた保育者のための自発的表現活動プログラムの開発をしていきたい。また音楽と身体を通した自由な表現活動が、子どもの自発的活動の育成に繋がっていく表現活動研究を進めていきたい。

参考文献

高橋うらら・井中あけみ著「音素材の工夫で子どもの身体表現活動を豊かに一様々な表現を楽しむ活動―」『女子体育』第61巻 6・7月号 2019年 pp.16-21

中山里美著 「総合的・横断的に領域「表現」を学ぶ授業の取り組み」『富山短期大学紀要』第54巻 2018年 pp.83-94

山田陽一著 『音楽する身体』昭和堂 2008年

小松正史著 『サウンドスケープのトビラ』 昭和堂 2013年

Claire Paolacci *DANCE et MUSIQUE* ARTES PUBLISHING 2017 p.17

謝辞 本調査にご協力いただきました静岡県S幼稚園の職員の皆様に深く感謝申し上げます。